

Title	近世後期係り結び研究史 : 『てにをは紐鏡』 『詞玉緒』 の受容と展開
Author(s)	河野, 光将
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2015, 49, p. 35-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61350
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

近世後期係り結び研究史

— 『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の受容と展開—

河野 光将

キーワード：『てにをは紐鏡』／『詞玉緒』／本居宣長／係り結び研究史

1. はじめに

ぞる、こそれ、おもひきやとは、はり、やらん、これぞいつつのとま
りなりける

という和歌が示すように、中世以来、テニヲハの呼応関係については注目されてきた。近世に至ると、雀部信頼の『氏爾乎波義慣鈔』（宝暦10〈1760〉年成）や梅井道敏の『てには綱引綱』（明和7〈1770〉年刊）なども登場し、テニヲハ研究は飛躍的に発展を遂げる。その中でも、本居宣長の『てにをは紐鏡』（明和8〈1771〉年刊、以下『紐鏡』とする。）と『詞玉緒』（安永8〈1779〉年成、天明5〈1785〉年刊、以下、『玉緒』とする。）は、後の係り結び研究の礎となったもので、その学説がどのように受容され展開していったのかについて検討することは、係り結び研究史を記述する上で避けては通れない問題である。

本論では、まず宣長の学説を確認した上で、それがあつた種の「誤解」を伴つて受容され、その中で係り結び研究が展開していくことを示す。加えて、その「誤解」の学説史的意義についても述べるものである。

2. 宣長の学説

2. 1. 『紐鏡』『玉緒』の問題点

宣長の『紐鏡』『玉緒』は、たとえば、古田東朔・築島裕（1972）に、

宣長の語法研究における業績は、係結びの呼応関係を明らかにしたことである。（p.250）

とあるように、本格的な係り結び研究の嚆矢とされている。そこで、まず『紐鏡』を確認すると、宣長は、現在言うところの終止形、連体形、已然形にあたる三行の「本」として、

右行：は・も・徒¹⁾
 中行：ぞ・の・や・何²⁾
 左行：こそ

以上の三類を挙げ、四十三段の「末」との呼応を「定まれる格」として示した。現在の観点から見ると、右行「は・も・徒」は終止形と対応し、中行「ぞ・の・や・何」は連体形、左行「こそ」は已然形と対応するものである。

しかし、この学説を係り結びに関するものとして捉える時、そこには、田中康二（2015）が指摘するような大きな問題が存在する。その問題とは、

- (1) 「は」と「も」をかりとしてよいか。
- (2) 「徒」とは何を意味するのか。
- (3) 「の」を「かり」としてよいか。
- (4) 「何」を「てにをは」としてよいか。

以上の4点であり、特に、(3)「の」と(4)「何」については宣長以降の研究で否定されることになる。従来、こうした点は宣長の学説の誤りあるいは稚拙な点として捉えられてきた³⁾。しかし、田中氏の指摘されたこの点については、宣長の学説を理解する上で重要なポイントであるので、次節ではこの点を念頭に置きながら、宣長の学説について考えていくこととする。

2. 2. 『紐鏡』『玉緒』の方法

前節で指摘した『紐鏡』『玉緒』の問題点を考える上で注目すべきは、宣長の「結び」への関心の強さである。『玉緒』巻1「惣論」には、

○紐鏡の三條の大綱とは、右 はも徒【徒とははもぞのや何などいふ辞のなきを今かりにかくいふ也。】の結び一條、中 ぞのや何【いかにいくたれの類みな同じ。】の結び一條、左 こその結び一條、此三條にして、これなんてにをはの**おほむね**なりける。結びとは、言のとちめをいふ。さるは一首のとちめのみにもあらず、いづれの句にまれ、語の切るゝ所は、皆そのとちめにて、上におけるてにをはの結びなり。(p.18)
(※以下、波線は筆者による。)

として、「結び」の定義を述べる。さらに巻7「文章の部」には、

上下のとゝのへは、いさゝかもことなることなし。いづくにまれ語の切るゝところは、かならず上のてにをはのかゝりをまもりて、りとると、るとると、つとつと、ぬとぬるとのたぐひなど、ことごとく歌のさだまりと同じごと、結びに心をつくべきものなり。(p.298)

として、「結び」の重要性について繰り返し述べている。こうした「結び」への着目は宣長に限ったものではなく、宣長以前のテニヲハ研究にもそれを窺うことができる。例えば、『春樹顕秘抄』に大幅な増補を加えた有賀長伯

の『春樹顕秘増抄』の構成を見ると（省略して示す）、

・はねてには⁴⁾ ・べみべくべら ・と ・とはと留る ・ぬ ・
 を ・か ・哉どめ ・よ ・より留 ・だに ・たゞ ・れと留
る ・ぞ ・つゝどめ ・な ・なん ・のとまり ・や ・やは ・
 まく ・まに ・ませ ・けき ・けりとめ ・こそ ・比とまり ・
てとまり ・てき ・にき ・てし ・なて ・ぬるめり ・みゆと
め ・し ・も ・すらんと留る ・かよふ文字 ・休字 ・かなを
 あまして休る ・かなを略す ・てにはをそへて聞く ・おなじてに
 は ・詞をいひのこして上へかへりてことはる ・詞をたすくるとに
 は ・詞をたして心得る ・心得べきてには ・いひかけてにはには清
 濁 ・かゝへなくしてよむまじき詞

とあって、下線を付したものは「留め」についての項目である。「留め」とは、「結び」と同様で、文の終止形式について述べるものであるが、こうした「結び」への関心を宣長も継承したと見るべきであろう。

この「結び」への関心の強さに着目すると、『紐鏡』『玉緒』に挙げられた「かかり」とは、実は「結び」の側から規定されたものであることが推測される。前節で挙げた4つの問題点も、この観点から見れば説明が可能である。(1)、(2)の「は」「も」「徒」についていえば、終止形で文が終止する時には、その終止形と「は」「も」が対応するか、あるいはそれらが無くても終止形で終止するということであり、(3)、(4)の「の」と「何」についていえば、連体形で文が終止する時は、その連体形が助詞「の」や疑問詞を一括した「何」と対応するということである。ここで宣長は、助詞「は」があると必ず終止形で終止するとか、助詞「の」があると必ず連体形で終止するといったようなことは説いていないことには注意する必要がある。先に挙げた4つの問題は、宣長の学説を係り結びに関するものとして捉えるところに生じるものであり、その背後には、「かかり」が「結び」に影響を与える（特

に、曲調終止⁵⁾の場合)といった係り結び観が影響している。しかし、これまで述べてきたように宣長の学説は、「結び」から「かかり」を帰納的に規定するもの⁶⁾と考えられるのであり、こうした帰納的規定に基づけば、前節であげた4つの問題点も宣長の学説内部での整合性を失わせるものではないことがわかる。

ここまで、宣長の係り結び研究が「結び」から帰納的に「かかり」を規定したと考えられることを述べてきた。宣長のこの研究は以降の研究に多大な影響を与え、いわゆる「玉緒学派」というものも登場することになるが、学説が受容・展開されていく過程の中で、修正される部分が出てくる。すなわち、助詞「の」と疑問詞を一括した「何」に対する「かかり」からの排除であり、この転換は、宣長の学説に対するある種の「誤解」に基づくものと考えられる。次節では、宣長以降の係り結び研究を辿りながら、この「誤解」について見ていくこととする。

3. 宣長以降の係り結び研究

3. 1. 「の」「何」の修正

『紐鏡』『玉緒』に掲げられた「かかり」の内、宣長以降の係り結び研究の中で、助詞「の」と疑問詞を一括した「何」が否定されていくこととなる。ここでは、宣長以降の研究を辿りながら、学説がどのように展開していくのかを確認する。まず、助詞「の」について見ると、例えば、宣長の門人である林圀雄『詞緒環』（天保9〈1835〉年刊）には、

○詞の玉緒にはゆる、右 はも徒。中 ぞのや何 左 こその三條をわかちて、てにをはの格をさとされたる のの條に ぞや何にくらぶれば のはや、軽きゆゑに、かの定れる格にはづれてむすぶことなきにあらず云ひひおかれたり。是によりて今つらへ考ふるに、のハぞや何にひとしからず。軽き のと、重き のと二例あり。詩に両韻の字ある類にて

はも徒に属べきのと、ぞや何に属べきのとふたつなり。軽きハはも徒のといひ、重きハぞや何のと、兩條に心得べきなれども、重きのハ玉緒にいひなれたるまゝに、ぞのや何と唱ふべし。こはいづれも其哥のいきほひによりて、おもきもかろきもしかむすばざれば哥のさまよからねば、おのづからのものにはあれど、にひ学ひのほどは、其きハにいたりたければ、たゞひとわたりに、ぞのや何とそらおぼえして、ぞや何とのをまたくひとしく心得て、結びを誤る歌おほく見ゆれば、今そのけじめあることをわきまへむとす。(上、14オ・ウ) (※下線は、筆者)

とある。林圀雄は、『玉緒』の記述を踏まえた上で、助詞「の」には終止形で結ぶものと連体形で結ぶものの2種があることを説く。これと同様の学説として、義門の『玉緒繰分』(嘉永4〈1851〉年刊)⁷⁾には、

△のは軽くてはもに近き由は、友鏡にはもの方へ近づけて図せるが如し。彼五十三段の活き詞どもへかゝることの、ぞや何とはもとの中間テニツハにある辞なるを考へて知べし。(爾之卷、18オ)

とあって、やはり助詞「の」が終止形と連体形の2種で結ぶことを説いている。両者とも鈴門に連なる者であったためか、助詞「の」を「かかり」から除くところまでは至らないものの、そこには宣長の学説との明白な差異が存在している。繰り返しになるが、宣長の「かかり」とは「結び」から帰納的に規定されたものと考えられる。しかし、ここに挙げた林圀雄、義門などの学説はむしろ、「かかり」が「結び」を規定すると捉えているように思われるのであり、このような「誤解」が生じたからこそ、宣長の学説に対する修正が行われたのであろう。つまり、『紐鏡』『玉緒』で示された宣長の学説は、その後の研究が展開して行く中で、いわば、正反対の理解がなされたと言えるのである。この「誤解」ともいえる学説理解は次第に「かかり」としての助詞「の」の異質さを強調させ、ついには、助詞「の」は「かかり」か

ら除かれることになる。萩原広道『てにをは係辞弁』（嘉永2〈1849〉年刊）は、

此の結びと見られたるハ、いひさして意^{コ、ロ}を含め残^{フク}したる略語の格【かゝる類を略語と名づけて、一つの格とするよし、くはしく略図義解にいへればこゝに省く。】にて、全^{マダ}く結び終りたるものとハ見えず。おほよそ歌は句の限^{カギリ}ありて、詞義^{コトバノコ、ロ}の尽る処までハ、いひがたきこともあるものなれば、半^{ナカバ}にていひさして、さて其^ノ残りたる意の、聞ゆるやうによむこと、常^{ツネ}なれば、此^{ナカバ}外にも多きことにて、瓊^{タマノヲ}綸^{ウゴ}に、動かぬ言にて結ぶ格、また変格などいはれたる類皆これなり。（4オ・ウ）

として、助詞「の」が連体形で結ぶ例と見られていたものは、係り結びではない連体形による曲調終止と同様のものとした。現在の観点からすれば、これは喚体句との区別を行ったものといえるが、その背景には、宣長の学説に対する「誤解」が存在していたことを指摘できよう。

こうした「誤解」は助詞「の」の場合だけでなく、疑問詞を一括した「何」の場合にも窺うことができる。例えば、義門『玉緒繰分』には、

【つ】【つる】・【ぬ】【ぬる】をば【いく】の結の時は、必^ツつと云ひぬと云てつるぬるとはいはざるが全^ツ躰の格り歟とさへ覚しきよしの考^{下に出ず⁸⁾活言徑}より考れば、「いづれの結も「いづれか」又「いづれ何々か」とかもじの有無^ナにて、連載各分るゝが自^オの定りと云うべきにはあらじ歟（氏之巻、45ウ）

とある。ここで義門は、「いく」の要素を持つ疑問詞の結びについて宣長の学説に疑義を呈しており、宣長が示した連体形と「何」の対応は助詞「か」の働きによるものではないかとするのである。ここで注意したいのは、前半の「【つ】【つる】・【ぬ】【ぬる】をば【いく】の結の時は、必^ツつと云ひぬ

と云てつるぬるとはいはざるが全躰の格り歟とさへ覚しき」の部分である。ここには、逆説的に、疑問詞「いく」があれば必ず連体形で結ぶという理解が当時存在していたことが窺われるのである。これは「かかり」が「結び」を規定するという理解の仕方であり、助詞「の」についての学説展開を示した時に確認したような「誤解」があったことを示している。この「誤解」は、疑問詞と連体形が対応しない例の存在を強調させることになり、助詞「の」のと同様に「何」も「かかり」から除かれることに繋がった。萩原広道『てにをは係辞弁』は、『玉緒』の記述を引用した上で、

今案にこれさることのごとくなれども、悉^{コトヘ}ひがことにて、一の卷なる三転証歌の中に、^{アゲ}拳られたるは、かの結びなると、いひさして意をふくませたる、略語なるとのみなり。さるは、何等と^{カサ}かと重なる時は、かならずかを語の下におく例なれば、結びの^{スチ}脈は、下の^{ウケ}かより受べきこと、さしあたる^{コトワリ}理なり。然るをいかにして考へ^{マガ}混へられけん。(9ウ・10オ)

と説く。今日の観点からすれば、宣長の考えた「何」という「かかり」は、「疑問詞+か」で連体形と呼応していたものが、次第に疑問詞単独でも連体形と呼応するようになったという現象を指摘しているのであり、本来的には助詞「か」の働きによるものといえる。しかし、日本語史の事実としては、疑問詞単独で連体形と呼応する例も少数とは言えず、宣長はそうした現象も含めた総体として「何」を立てたと考えられる。事実、宣長は『玉緒』巻4「何」についての条で、

○何のしたにおく か かは
何等の辞をおきて、その下の結びとの間に、かもじをはさむこと常におほし。なにかうらみん、たれかしらまし、いつかきなかんなどの如し。又夢になにかはなぐまさん、いつかは雪の消る時あるなどの如く、かは共おけり。さて此かは、右のごとく何等の下にやがてつゞけてもお

き、又言をへだててもおけり。(p.160)

としており、助詞「か」と「何」との関連についても述べているのである。にもかかわらず、宣長は「か」を立てず、「何」を立てたというところこそ、宣長の学説の意図があると見るべきであろう。宣長は「結び」の側から規定した「かかり」との対応を述べたが、宣長の後、「かかり」は「結び」に対して形態的限定を加えるものとして「誤解」とも言える理解がなされた。ここでは、その結果として、助詞「の」と疑問詞を一括した「何」が除かれる過程を概観した。宣長の学説は皮肉にも、その意図を離れたところで日本語における係り結びという形態統語論現象の研究を進展させたのである。

3. 2. テニヲハに対する品詞論的考察の進展

近世における係り結び研究は、これまで述べてきたように、宣長の学説に対するある種の「誤解」に支えられ進展したと見えるのであるが、それに加え、もう一つの原動力として、テニヲハに対する品詞論的検討が進んだことが挙げられる。中世歌学以来の伝統的テニヲハ論におけるテニヲハとは、現在でいうところの助詞、助動詞、副詞などを含んだ雑多なものであった。しかし、幕末になると、そのテニヲハを助詞・助動詞に限定する動きが出てくるのであり、そうした動きを如実に示すものとして、富樫広蔭『詞玉橋』が挙げられる。『詞玉橋』は文政9(1826)年に草稿が成立して以降、数次の改訂が行われ、弘化3(1846)年に一応の完成を見るのであるが、そのおよそ20年間での学説の進展を窺える貴重な資料である。この20年間の改訂については、尾崎知光(1973)によって大きく3つに分類されており、「文政草稿本」「天保改稿本」「弘化改正本」(以下それぞれ、草稿本、改稿本、改正本と略称する)の3種となる。以下、この3分類に従って『詞玉橋』を見てみると、まず、草稿本「カ、ル辞ノコト并ムスブ辞ノコト」の条には、

カ、ル辞トハ、上ノ言ヲウケテソノ意下ヘカケ及ボス文字ヲイフ。ムス
 ブ辞トハ、カ、ル辞ヲウケテ、ソノ意ヲムスビテキレテスワル文字ヲ云
 (12ウ)

とある。ここでは、「かかり」について、「上ノ言ヲウケテソノ意下ヘカケ及
 ボス文字」としているのであり、品詞論的には、何の限定も加わっていない。
 しかし、次の段階である改稿本になると、「カ、リムスヒノ事」の条は、

係トハ、上ニイヘルもにをはのぞやこそ等ノ類、言詞又動辞ナドニ
 繋テ、静辞ニ合セナドシテ上ノ意ヲ下ヘ云係テ下ナル結ニ打合フヲ云
 フ。何ノ類ハ言ナガラ、辞ト同ジク係トモ成ルナリ。(中略) 結トハ、
 詞ニテモ、辞ニテモ、上ノ係ニ打合^{ウチアヒ}テ、ソノ意ヲ結テ止ルヲ云ナリ (21
 ウ・22オ)

と改められるのである。草稿本の段階では、「かかり」は単に「文字」と規
 定していたに過ぎなかったが、「何ノ類ハ言ナガラ辞ト同ジク係トモ成ルナ
 リ」と記述から、広蔭が「かかり」を「辞」に限定しようとしていること
 が窺えるのである。なお、広蔭の学説における「言」とは、現在の体言に
 当たるものを指し、「詞」とは活用ある自立語、つまり動詞・形容詞にあたり、
 「辞」とは、助詞・助動詞を指すものである。今日の日で見れば、疑問
 詞などは副詞にあたるものであり、これらを体言と同列に扱うことには問題
 もある⁹⁾が、テニヲハの内実が、様々なものが渾然となっていた状態であつ
 たことを踏まえれば、この指摘は注目される。さらに、改正本の段階にな
 ると、「^(かかりむすび)加々理牟須毗ノ事」の条は、

係トハ、静辞ノもにをはばのがぞやかこそ等、言詞動辞ニ繋ケ、
 静辞ニ合セ等シテ、上ノ意ヲ下ヘ云係テ下ナル結ニ打合フヲ号フ。【詞
 ノ玉ノ緒ニ何ト号テ標ラレタル、なになどなぞたれたがいかにい

かゞ いかで いづれ いづら いつ いく等、悉様言ニテ、辞ニ非レバ、係トナラザル道理、又、様言ニ静辞ノ繫レルヲモ同部ト所為タル誤等ノ事モ委ク下ニ云ベシ】結トハ、詞ニテモ、辞ニテモ、上ノ係ニ打合テ、ソノ意ヲ結テ断テ止ルヲ号フ（17オ・ウ）

と改められる。ここでは、明確に「係トハ静辞」であると広蔭は述べている。「静辞」とは現在の助詞にあたり、こうした観点から「何」は「かかり」ではないとするのである。こうした品詞論的な分析が行われたことも、また、係り結び研究の展開上看過できないものなのである。

4. 「誤解」の功罪

ここまで、宣長以降の係り結び研究が宣長の学説に対するある種の「誤解」を伴って進展してきたことを中心に述べてきた。ここでは、その「誤解」ともいべき学説理解が学説史的にどのように位置付けられるかを考えてみたい。

宣長における「かかり」とは、「結び」から帰納されたものと考えられることは既に述べた。換言すれば、それは、係り結びという現象も含めた日本語の終止法に関する統辞論的現象の総体的把握であったといえる。そこには、当然ながら係り結びではないもの（＝喚体句）や、二次的な係り結びである疑問詞と連体形の呼応現象も含まれてくる。しかし、宣長の後、「かかり」とは「結び」に対して形態的限定を加えるものとして理解されたことによって、異例に対する分析が進み、「かかり」の中でも異質なものを、つまり、「の」と「何」の排除に繋がることとなったのである。この点に着目すれば、この「誤解」は今日の係り結びの概念に繋がる進展を支えたものとして、学説史的に評価すべき面が存すると言える。また同時に、日本語に対する品詞論的分析が進んだことにより、「かかり」の中から、現在の係助詞に繋がるものが析出されることにも繋がった点も指摘できよう。しかし、この「誤

解」がもたらしたのは、こうしたプラスの側面だけではない。宣長は、終止法に関する統辞論的現象を網羅的に整理したのに対し、宣長以降は次第に助辞論へと変化していった結果、「徒」に対する誤った理解が生まれることとなったのである。例えば、「の」と「何」を排除した功績が評価されている萩原広道『てにをは係辞弁』は、

さて先彼三転の右、行を。徒とて挙げられたる中より。は もの二つを別にぬき出_レされたるは。徒の中に は もは殊に多くて著き辞なればなるべし。然はあれども。其、余 てにをは の ば ど で より まで へなども。またおのへ応きて結ぶ処へかゝれ、ば。は もばかりを。とり出_レべきにはあらざるが如し。(2ウ)

としている。これは、係り結び研究が統辞論的観点を失い、助辞論へと変化していった結果、「徒」という抽象的「かかり」ではなく実体のある助詞が求められたためと考えられる。

このように宣長の学説に対する「誤解」は、現在に繋がる係り結び研究を推し進める要因となった反面、係り結びを形態的側面においてのみ把握するという、ある意味では宣長の学説を矮小化したとも言うべきマイナスの側面も指摘できるのである。

5. おわりに

『紐鏡』『玉緒』によって示された宣長の学説は、結果的に、宣長の意図を離れたところで係り結び研究を推し進めることとなった。しかし、その過程で統辞論的観点が失われ、形態的側面からのみ係り結びを把握するようになったといえる。近世の日本語研究とは、日本語の形態的側面を重視したものであった。この点については批判されることもあるが、一方では、活用研究などある程度の成果をあげたのもまた事実である。こうした点から見れば

ば、近世における係り結び研究を巡る学説展開は、近世における日本語研究の成果と限界を端的に示すものとして捉えることができるのである。

※引用に際し、適宜表記、句読点などを改めた箇所があることを断っておく。

[注]

- 1) 「徒」とは、はもぞのや何などのテニヲハが無いことを表す。
- 2) 「何」は、疑問詞を一括したものを指す。
- 3) 仁田義雄(1984)など。
- 4) 「はねてには」とは「らん」「ん」など撥音尾を持つテニヲハをさす。
- 5) 通常、文は終止形で終止するが、それとは異なり連体形、已然形で文が終止することを曲調終止という。
- 6) こうした点からすると『紐鏡』『玉緒』を直ちに「係り結び」について研究したものとするのは慎重になるべきといえる。
- 7) 刊行は義門の没後であり、また、『てにをは係辞弁』よりも後であるが、三木幸信(1967)によれば、義門が新井守村へ認めた天保12年の書簡から、天保年間には既に稿が成っていたと推定される。
- 8) 『活言径』については、同じく義門の『活語雑話』の三編(天保13(1842)年刊)の中に、

城戸千楯ノワレニカタリテ、「詞玉緒巻いくよ祢覚ぬいく結しつノ類ヲバてにをは変格ノ一例トセラレタルニツキ、近口井尻はるし活言径ト云物ヲミルニ、ソレニ云ハク、宣長が紐鏡十九段のぬ廿段のつ、是をいくの結びにおく変格之事、此はいくと云ても下にかといはぬ時ハ必ぬつとおくなり、又下にかといへば必ぬるつると結ふ也、又廿六段のつ廿七段のぬ、此二段にてはぬつと結ふことなし、いくといへハカ文字なくても必ぬるつと結ふなり是ト云ヘリ、ゲニ然ル事歟、イカニ思フ)(四十二ウ)

とあり、山口の井尻はるしなる人物のものであることがわかる。しかし、井尻はるしについては詳細不明で、また、『活言径』も出版された形跡がないため、おそらく写本のみで流通したと考えられる。

- 9) 山田孝雄(1943)は、副詞の位置付けに問題があることを厳しく批判し、広蔭の分類の非合理的な面を指摘した。しかし、近世期国学者の日本語研究において副

詞を適切に位置付けしようとしたのは、ほぼ富士谷成章に限られるのであって、本論はそうした問題があることは認めつつも、広蔭の学説は日本語研究に一定の進歩をもたらしたと考える。

[参考文献]

- 尾崎知光 (1957) 「草稿本『詞玉橋』の成立」『国語と国文学』34・12
 尾崎知光 (1973) 「『詞玉橋』の学説の成立——神宮文庫本による——」『愛知県立大学説林』22
 尾崎知光 (1977) 「富樫広蔭の文法学説—その主要点と春庭の学説の継承にふれて」『説林』31
 尾崎知光 (1983) 『国語学史の基礎的研究—近世の活語研究を中心として』笠間書院
 田中康二 (2015) 「係り結びの法則成立史」『神戸大学文学部紀要』42
 仁田義雄 (1984) 「係結びについて」『研究資料日本文法⑤助辞編 (1) 助詞』明治書院
 古田東朔・築島裕 (1972) 『国語学史』東京大学出版会
 三木幸信 (1967) 『義門研究資料集成 中巻』風間書房
 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館
 ——— (1943) 『国語学史』宝文館

[引用テキスト]

- 『春樹顕秘増抄』：福井久蔵編 (1938) 『国語学大系 第七巻』国書刊行会
 『てにをは紐鏡』『詞玉緒』：大野晋編 (1970) 『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房
 『活語雑話』：早稲田大学古典籍データベース (請求記号：ホ02_00617)
 『詞緒環』：大阪市立大学森文庫蔵本による
 (http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/mori/505.djvu)
 『詞玉橋』
 ・草稿本：(1979) 『勉誠社文庫64 詞玉橋・辞玉襷』勉誠社
 ・改稿本：京都大学蔵本による
 ・改正本：(1979) 『勉誠社文庫64 詞玉橋・辞玉襷』勉誠社
 『玉緒繰分』：早稲田大学古典籍データベース (請求記号：ホ02_05598)
 『てにをは係辞弁』：早稲田大学古典籍データベース (請求記号：ホ02_05635)

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

A History of the Studies on *kakari-musubi* in the Late Edo Period
 —The Reception and Development of *Tenioha himokagami*, *Kotoba no tamanoo*—

Mitsumasa KONO

This paper attempts to argue that Moto'ori Norinaga's *Tenioha himokagami* and *Kotoba no tamanoo* were accepted with a kind of misunderstanding. In Moto'ori Norinaga's *Tenioha himokagami* and *Kotoba no tamanoo*, it is considered that *kakari* is defined by *musubi*.

In studies after Norinaga, *kakari-musubi* was thought of as an automatic agreement rule by which the presence of one element (*kakari*) requires the presence of another (*musubi*). Consequently, “*の* (adnominal particle)” and “*何* (wh-phrase)” were removed from the category of *kakari*. However, this understanding of *kakari-musubi* was only based on morphological aspects. This brought about the misunderstanding regarding “徒 (\emptyset)”.